様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月２７日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９７２０１８８
研究課題名（和文）　中国唐宋時代の河南における地域開発と軍事集団に関する研究

研究課題名（英文）　a study about the community development and the military group in Henan of Tang-Song China

研究代表者
山根　直生（YAMANE NAOKI）
福岡大学・人文学部・准教授
研究者番号：７０４１２５６７

研究成果の概要（和文）：
近代以前の中国の姿を決定したと言われる宋代（西暦 10～12 世紀）、その政権の確立までには、唐代後半（8～9 世紀）の河南に置かれた軍事集団が大きな役割を演じた。史料に乏しく従来明らかでなかったこの河南地域について、本研究では政治史的・歴史地理学的視点から考察を加え、江南へ移住した彼らがしだいに宗教的な色彩で祖先史を語っていった過程を明らかにし、唐代での実態、後世での祖先史の変化、そしてその双方を複眼的に考察する手法を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：
You have explained what a pre-modern China used to be was determined in the Song period (10-12c.) for a long time. Until the political power was established, however, the military group had played an important role, who had stationed at Henan in late Tang period (8-9c.). So far the study of Henan region has never been examined because of the shortage of primary sources. But I consider this region from the viewpoint of political history and historical-geography. Then I make clear the group emigrated to Jiangnan and told their ancestral history. As a result, I will be able to show their actual condition in late Tang period, the transition of their ancestral history they told in later period, and a method of considering both the condition and the transition compositely.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,300,000	0	1,300,000
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	570,000	3,770,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：　史学・東洋史
キーワード：唐宋、河南、藩鎮、節度使、軍閥、宗族、移住、軍事集団

１．研究開始当初の背景

(1)元来史料に乏しい河南地域は、唐宋時代史において重要な役割を演じたことを認められるにも関わらず、従来の研究上ではまま看過されてきた。宋都開封に関する研究のみは突出しているが、都市研究としてのその成果も唐都長安の研究のような面としての広がりを得るには至っていない。2004 年から 2009 年まで、多数の中国史研究者が参加して行われた文部省特定領域研究「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成－寧波を焦点とする学際的創生－」でも、焦点となっていたのは寧波すなわち江南地方であり、他者による河南研究の進展は望みがたい状況にあった。

(2)しかし、それまで唐宋間の江南地域における開発・移住・血縁集団の構築に関するミクロな視点での研究（「静海・海門の姚氏－唐宋間、長江河口部の海上勢力」(『宋代の長江流域　宋代史研究会第八報告集』、汲古書院、2006 年)、「唐宋間の徽州における同族結合の諸形態」（『歴史学研究』804 号、2005 年、など）を進めてきた研究代表者（山根）には、この江南の地方政権、そして移住者の多くが河南から出発していることは、極めて示唆的に思われた。

(3)また、すでに長足の進展を見せていた唐代中国のソグド人に関する研究（後、森部豊『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』、関西大学出版部、2010 年、など、において結実）は、ソグド人を中心とする勢力と河南を根拠地とする勢力が唐末に激しい闘争をくり広げ以降の中国史の歴史的展開を規定したとも言えるだけに、これと河南地域に関する研究とを理論的に接合すれば、多くの興味深い問題を考察できるという可能性が、研究代表者には強く感じられていた。

２．研究の目的

(1)唐代後半の河南地域に置かれた軍事集団は、その地域の開発だけでなく、後の江南に建国された呉・呉越・楚といった地方諸国の成立に関わり、さらに宋の首都開封もこの河南に位置する。こうしたことから、この地域とそこにあった集団の歴史的重要性については従来周知のものであったが、主に社会経済史的史料に乏しいという理由から深く考察されてこなかった。本研究はこの欠を補い、河南地域およびその軍事集団の具体像について探ろうとしたものである。

(2)なお、具体化のあり方としては、先述したソグド人研究と対照しうるだけの史料をもって語ることを目標とした。「ソグド人」という考察対象の民族的特性ばかりが注目されがちだが、私見では同研究の特色は、大量の金石史料、特に墓誌銘を活用して家族・家系の視点からの歴史像の構築を図り、唐代後半に関する従来の研究ではぬぐえなかった国家史的な視点を相対化したことにある。こうしたソグド人研究との理論的接合を見すえ、河南地域およびその集団について語る上でも、同様に墓誌銘から語るよう目指した。

３．研究の方法

考察対象とする河南地域とその地の軍事集団に関する社会経済史的史料が乏しいことから、あえてこうした方面からの考察にはよらず、(1)政治史的視点、(2)歴史地理的視点からの接近を試みた。

(1)政治史的視点においては、近年の中国近代史研究における「軍閥」概念の見直しから示唆を得つつ、唐代の軍事集団に関する従来の通説的理解である「藩鎮」概念についての見直しを行った。具体的には、研究史上での「藩鎮」概念の変遷を把握した上で、『旧唐書』『新唐書』『資治通鑑』といった唐代後半期に関する基本史料での「藩鎮」の語の用法を改めて網羅的に検討することとした。

(2)歴史地理的視点においては、河南および江南現地での調査に訪れ、また、唐末以降彼らが移住していった江南での入植・開発・社会的上昇の過程を考察し、唐宋以降に彼らの子孫が祖先史を形成・再構成していく様子をも明らかにした。なお、これらの考察の過程では、たびたび「唐代および後代の実態に関し残された記録」と「唐代について美化・粉飾を交えつつ語る祖先史」との峻別を求められることとなり、主として文化人類学の手法に学びながら、これに応えるための考察方法を見出していった。

４．研究成果

研究方法(1)(2)それぞれから生じた成果は以下のようなものとなった。

(1) 本来の語義において「藩鎮」とは、唐朝に対し独立の姿勢を示した河北・河南・山東の有力節度使を指すにすぎなかったが、戦前における唐代後半期研究の創始、そして戦後の継承発展において、「世界史の基本法則」との関連から全国の節度使をも「独立を志向しつつも徹底できない」ものとして包含するよう拡大解釈されていった。現在では「藩鎮」の「地域差」が広く認知されているが、こうした研究代表者の新たな研究史理解に基づけば屋上屋を架したと言うべきものであること、そしてまた研究代表者の理解においても間違いなく「藩鎮」と呼ばれるべきであった河南地域とその軍事集団の重要性は、いっそう高く評価されるべきこと、を導き出した。

(2)河南の軍事集団は唐末に江南へ、あるいは半ば難民のような開拓者として、あるいは現地政権の傭兵的軍事力として移住していった。彼らの後裔たちが墓誌銘などにおいて語った祖先史は、こうした歴史的過程をうかがわせるものとして貴重だが、子孫の社会的上昇につれ祖先史も儒教の聖人である朱熹・二程に関連づけられて語り直され、唐代の生々しい実態からは遠ざかっていく。宋・元・明と変容を続けた祖先史を純粋に祖先史として、言説ととらえ直して追跡することで、言説の変容過程、そこに潜む唐代の実態、両者をともに明らかにすることができた。

(3)さらに、(2)から派生した予想外の成果として、祖先史を語った子孫たちをとりまく宋・元・明の実態的状況について、従来の宋～明研究では明らかでなかったところを指摘できた。とりわけ、明初における江南から華北への強制移住と、これによって構築されていた兵制が明中期に弛緩したことが、江南への再移住をうながし、その過程で新たな祖先史形成のあり方を醸成したという指摘は、従来の明代史研究では見られなかったものとなった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① <u>山根直生</u>、研究フォーラム 中国唐宋時代の徽州に見る「実態としての地域」と「語られた地域」、歴史と地理、査読無、通

巻 639 号、2010（掲載決定）

② 山根直生、程敏政の祖先史再編と明代の黄墩（篁墩）移住伝説、東洋史研究、査読有、第 68 巻第 4 号、2010、pp.27－56

③ 山根直生、上城千明、川部瑞代、藤野ゆかり、山田貴司、「福岡平野史」という視野に関する提言―中国史研究の立場から―、七隈史学、査読有、第 11 号、2009、pp.175－194

④ 山根直生、宋元明の徽州における黄墩移住伝説、九州大学東洋史論集、査読有、36 号、2008、pp.123－161

⑤ 山根直生、回顧と展望 隋唐、史学雑誌、査読無、第 116 編第 5 号、2007、pp.208－214

〔学会発表〕（計４件）

① 山根直生、唐宋時代史研究における節度使＝藩鎮＝軍閥概念の再検討、広島史学研究会大会、2008 年 10 月 27 日、広島大学

② 山根直生、“福岡平野史”という視野に関する提言―中国史研究の立場から―、七隈史学研究会、2008 年 9 月 28 日、福岡大学

③ 山根直生、唐末徽州の黄墩伝説と明人程敏政－移住伝説の創造と変容、九州歴史科学研究会、2007 年 7 月 28 日、西南学院大学

④ 山根直生、唐後半期藩鎮史再考－唐宋間政治史叙述、河南大運河両岸地帯への考察の試みとして、中国四国歴史学地理学協会大会、2007 年 6 月 3 日、県立広島大学

〔図書〕（計２件）

① 松塚俊三、西谷正浩、則松彰文、森丈夫、梶原良則、桃崎祐輔、山根直生、福嶋寛之、紙屋正和、森茂暁、武末純一、星乃治彦、西日本新聞社、歴史はもっとおもしろい、2009、pp.109－122

② 飯山知保、久保田和男、高井康典行、山根直生、山崎覚士、宮崎聖明、塩卓悟、劉浦江、渡辺健哉、武田和哉、毛利英介、藤原崇人、豊島悠果、高井康典行、飯山知保、汲古書院、宋代史研究会研究報告第九集「宋代中国」の相対化」、2009、pp1－11 および pp.467－468

６．研究組織

(1)研究代表者

山根　直生（YAMANE NAOKI）

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：70412567

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：